

# 美術館ニュース

群馬の森

no. 181  
2020 7/1

1



2



3



4



5

1 牛嶋直子《森でみる夢》  
2019年

2 門田光雅《富嶽》2020年

3 鬼頭健吾《cartwheel galaxy》2019年 個人蔵  
[撮影:木暮伸也/写真提供:rin art association]

4 原 游《アブラカダブラ 絵画展》(市原湖畔美術館、2017年) 展示風景  
[撮影:長塚秀人/写真提供:市原湖畔美術館]

5 佐藤万絵子《てのひらを いらいて(この夜をおし 上げていく光に名前はつ げずに)》2012年  
[撮影:木暮伸也/写真提供:群馬県立館林美術館]

## 絵画のカタ

5人のアーティストとみる  
群馬県立近代美術館の  
コレクション

Looking  
At Pictures

5 Artists and The Collection of  
The Museum of Modern Art, Gunma

2020年6月27日[土]ー8月23日[日]

会場：展示室 3、4、5 ※会場が変更になりました。

休館日：毎週月曜日（ただし8月10日は開館）

開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

観覧料：一般830(660)円、大高生410(320)円

\*（ ）内は20名以上の団体割引料金

\*中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料

美術館が収蔵作品を紹介するコレクション展示(常設展示)は、時代順であったりテーマ別であったり、多くの場合、美術史の解釈に基づいた展示となっています。本展では、いつもとは少し違った角度から当館収蔵の絵画作品を紹介しようと、現代作家5人に、それぞれの視点から当館コレクションを見渡して数点ずつ展示作品を選び出してもらいました。

5人は、同じ絵画という表現分野において制作活動を続けている作家です。といっても彼らが絵画に向き合う理由は様々で、牛嶋直子にとっては画面に描くモチーフや表現方法の探求であり、門田光雅にとっては絵具の質感や筆の動きと色彩との関係性の模索です。さらに鬼頭健吾は絵具とカンヴァスという制約から逃れてあらゆる既製品で色と形を表現し、逆に原游は木枠に張られたカンヴァスの上に置かれた絵具という絵画の物質としての側面に着目します。そして佐藤万絵子は、そうした物質からイメージが立ち上がる瞬間、つまり絵画が生まれる瞬間をとらえようと、空間全体を使って絵画を表現しています。

古くて新しい絵画の可能性を切り開いている現代作家5人の作品と、彼らがコレクションから選んだ作品を、ぜひ展示室で見比べてみてください。彼らがその作品を選んだ理由とあわせてご覧いただければ、皆さんもこれまでとは違った絵画の見方ができるようになるでしょう。

※関連イベントについては、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、当面の間開催を見合わせます。最新情報は当館ホームページでご確認ください。

●[同時開催]「catch the eyes—目から心へ—」\*会期を延長しました(P3参照)。

●「こども+おとな+夏の美術館」は中止とさせていただきます。



6



7



8



9



10

6 山口薫《白樺林の馬と池》  
1967年

7 カミーユ・ピサロ《エラニーの教会と農園》1884年

8 モーリス・ルイス《ダレット・サフ》1958-59年

9 仲田好江《鏡の前の裸婦》  
1938年

10 エドヴァルト・ムンク  
《オースゴルストランの夏》1889年頃

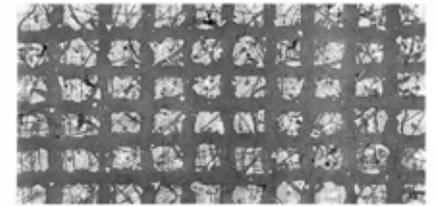
## 令和元年度 新収蔵作品紹介

群馬県立近代美術館では、令和元年度に油彩 8 点、水彩 1 点、版画 9 点、彫刻 2 点の合計 20 点の作品を寄贈により新たに収蔵しました。

本県ゆかりの作家の作品や、戦後アメリカの抽象美術を代表する作家のひとりサム・フランシスの版画作品がご所蔵者や作家のご遺族のご厚意により寄贈されました。

新収蔵作品は当館のコレクション展示等において順次公開していく予定です。

分類	No.	作者	作品名	寄贈者名
油彩 (8点)	1	司修	チャタレイ夫人の恋人—自由！それはまことに偉大な言葉であった	阿久津功氏
	2	司修	チャタレイ夫人の恋人—出口を求めずにはられない	阿久津功氏
	3	司修	チャタレイ夫人の恋人—測りがたい、柔軟な、深く、神秘的なもの	阿久津功氏
	4	司修	チャタレイ夫人の恋人—するとそこには日光がかなり強く溢れていた	阿久津功氏
	5	司修	チャタレイ夫人の恋人—人間の肉体の生活は、美しい宇宙の中で	阿久津功氏
	6	司修	狐—ひとには見られたくない非常に鋭い秘密な興奮が生まれる	阿久津功氏
	7	司修	狐—一瞬、静かな、純粋な緊張感が流れ	阿久津功氏
	8	南城一夫	(題不詳)	笠木壽子氏
水彩 (1点)	9	湯浅一郎	清水寺	阿久津功氏
版画 (9点)	10	岡鹿之助	観測所	笠木壽子氏
	11	坂爪厚生	サファリランドー時間の属性	
	12	坂爪厚生	サファリランドー飽食	
	13	坂爪厚生	情況88 アフリカからの贈り物Ⅳ	
	14	坂爪厚生	反デジタル絵—合体するUFO・上から下へ	
	15	坂爪厚生	反デジタル絵—そらの穴あるいは上昇するUFO	
	16	南城一夫	サーカスの馬	笠木壽子氏
	17	サム・フランシス	インディゴ・ウッド	阿久津功氏
	18	サム・フランシス	寒い春	阿久津功氏
	彫刻 (2点)	19	森村西三	森村堯太胸像
20		森村西三	銅帯留金具 兎	岩尾光代氏



(上から)  
司修《チャタレイ夫人の恋人—自由！それはまことに偉大な言葉であった》1970年  
油彩・板 23.1×15.9cm

サム・フランシス《寒い春》1988年  
エッチング、アクアチント・紙 115.9×241.3cm

森村西三《森村堯太胸像》大正末頃  
銅、铸造 57.5×37.0×22.0cm

### 司修の挿絵『チャタレイ夫人の恋人』

1936年前橋生まれの画家<sup>つかさおさむ</sup>司修は、昭和、平成の時代を通して書籍の挿絵原画を数多く制作してきました。その仕事は日本の出版文化や装丁美術を考える上でも重要な位置を占めています。今回収蔵された7点の油彩作品は昭和45年(1970年)に河出書房新社が世に出した「カラー版世界文学全集」の49巻『ロレンス チャタレイ夫人の恋人／狐／エトルリア紀行／他』の挿絵原画です。D.H. ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』といえば戦後間もなく日本で翻訳された際、性表現の検閲をめぐって裁判が行われ、ベストセラーになったことで知られています。物語のなかで、不幸せな結婚生活に違和感を覚える主人公コニー・チャタレイは、森番のメラーズとの恋と葛藤を経て社会的、精神的なくびきから解放されてゆきます。司はオディロン・ルドンやマックス・エルンストの影響を強く受けながら、物語の舞台となる森や樹木のイメージを織り交ぜ、コニーの心象風景を表現しました。シュルレアリスムの代表的な描画法であるデカルコマニーを効果的に用いた、小品ながらも力のこもった作品です。

## コレクション展示

## [展示室 2・6]

## ■日本と西洋の近代美術Ⅱ 6/27～8/23

当館の収蔵品より、印象派から20世紀前半の西洋近代絵画ならびに彫刻、群馬ゆかりの作家や明治から昭和を代表する作家たちによる日本近代洋画を展示します。また、臨時休館のため春の展示期間が短くなってしまったパブロ・ピカソ《ゲルニカ(タピスリ)》を、8月2日(日)までの期間限定で引き続き展示しますので、この特別な機会にぜひご覧ください。



パブロ・ピカソ《ゲルニカ(タピスリ)》

## [展示室 7] 山種記念館

## ■塩原友子の世界 6/27～7/26

## ■動物のかたち 7/28～8/23

前橋出身の日本画家・塩原友子は、幾何学的な画面構成やコラージュの表現を取り入れるなど様々な技法や画題を試み、自由な画風を展開しました。「塩原友子の世界」ではそうした彼女の世界観を見せる作品を、つづく「動物のかたち」では、親子で楽しめる動物をテーマに、作家の動物へのまなざしやその表現に注目してご紹介します。



塩原友子《鯉》

## ◇展示の日程変更のお知らせ◇

当館は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、前年度3月1日(日)より長らく臨時休館を続けてまいりましたが、開館にあたり、できるだけ多くの皆様に展示をご覧いただけるよう、一部、展示の日程と内容を変更いたします。

公開期間が限られてしまった春の企画展示「catch the eyes 一目から心へー」は、6月27日(土)から8月23日(日)まで展示室1で延長して開催いたします。それに伴い、展示室1で同時期に予定しておりました夏の企画展示「絵画のミカター5人のアーティストとみる群馬県立近代美術館のコレクション」は、展示室3、4、5での開催となります。

なお、展示室3「現代の美術Ⅰ」、展示室4「ミロの版画」、「生誕120年 南城一夫」、展示室5「美術の森」は秋以降に延期させていただきます。

今後の状況次第では、さらに変更となる可能性もありますので、展示の予定や詳細につきましては、当館HPやFacebook等をご確認ください。何卒ご理解、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

HP: <http://mmag.pref.gunma.jp/>

Facebook: <https://www.facebook.com/gunmakinbi/>

M u s e u m | N e w s

来年1月に開催が予定されていた「群馬青年ビエンナーレ」は新型コロナウイルス感染症の影響をなるべく緩和するため、半年延期し、来年7月に開催することとします。募集開始は今年の秋を予定しています。応募要項ができましたら、ポスターおよび当館ホームページで告知します。

## 群馬青年ビエンナーレ 2021 日程変更のお知らせ

新しい展覧会会期(予定)   2021年 7月 17日(土) – 8月 22日(日)	賞(予定)	大賞 1点	100万円(当館買い上げ)
募集開始(予定)   2020年 10月頃		優秀賞 1点	50万円
募集締切(予定)   2021年 1月頃		奨励賞 5点	各 10万円
出品料   無料		ガトーフェスタ ハラダ賞	50万円 (同社買い上げ)

| 審査員 | 荒木夏実(東京藝術大学准教授)

澤田知子(写真家)

鈴木ヒラク(アーティスト)

長谷川新(インディペンデントキュレーター)

鷲田めろ(十和田市現代美術館館長)

\*敬称略・50音順

| お問い合わせ先 | 〒370-1293 群馬県高崎市綿貫町 992-1  
群馬県立近代美術館  
「群馬青年ビエンナーレ 2021」係  
TEL.027-346-5560  
<http://mmag.pref.gunma.jp/>

**保** 田春彦（1930～2018）は1958年から2年間フランスでオシップ・ザッキンに学び、8年にわたりイタリアで制作活動を行った。帰国後、古代遺跡、地下墳墓や山上の集落での体験を源とした抽象彫刻を発表する。

《立ちあがる幕舎》は、90～93年頃に制作された幕舎シリーズの1点である。幕舎とは簡単に言うとテントのことである。本来しなやかな布からなる幕舎は、錆色の鉄板と骨組みのような形の重なりによって、裾広がりの方にモチーフの要素をとどめつつ重厚な抽象彫刻へと姿を変えている。

保田の建築や都市をテーマとした作品の根底には、常に現代文明の脆さへの意識と、古代や中世の人々の生きた空間への憧憬があるようだ。幕舎というモチーフは旧約聖書の出エジプト記でモーセらが荒野に幕舎を設営したことに想を得たという。そこには保田の「原点に戻る」という思いがあった。骨組みに布を張った簡易なこの建築は、都市を構成する単位としての住居の原型である。かつて人々が祈り、暮したその空間を原点として、この作品は、現代の都市に失われた「地に根ざした生活」を取り戻そうとする、何もない荒野に立ち上がる新しい架空の都市の萌芽なのである。

保田が影響を受けた作品としてたびたび挙げる作品に、ザッキンの《破壊された都市》がある。第二次世界大戦で壊滅的な被害を受けたロッテルダムと人々の心の復興を祈る彫刻、そして現代に人間本来の精神への回帰を示す《立ちあがる幕舎》。師弟の手によるこれら二つのモニュメントを、当館では8月23日まであわせて見ることができる。



保田春彦《立ちあがる幕舎(ばくしゃ)》  
1992年 鉄 206.5×212.2×122cm  
作者寄贈

## 次回展覧会案内

## 佐賀町エキジビット・スペース 1983-2000

—現代美術の定点観測—

2020年9月12日[土] - 12月13日[日] (予定)

会場: 展示室1

休館日: 毎週月曜日 (ただし9月21日、11月23日は開館)、9月23日(水)、11月24日(火)

観覧料: 一般 830(660)円、大高生 410(320)円

\*( )内は20名以上の団体割引料金

\*中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名、群馬県民の日(10月28日)に観覧される方は無料

**目** 本の現代美術が飛躍的に発展した1980年代、世界のアートシーンには、ドイツにクンストハレ(コレクションを持たない美術館)があり、アメリカではニューヨークのPS1(廃校となった公立小学校を改修し展示ギャラリーとアーティスト・イン・レジデンスを併設)が先鞭をつけるなど、新しい作家を生むインフラストラクチャーの開発が多く見られました。

そのような状況の中、パルコなどの企画広告ディレクターであり、「現代衣服の源流展」(京都国立近代美術館、1975年)や「マッキントッシュのデザイン展」(西武美術館、1979年)などのキュレーション、またプライベートブランドの先駆けでもある「無印良品」の発案立ち上げなどに関わった小池一子は、東京都江東区佐賀町にあった食糧ビル(1927年竣工)の3階講堂を修復し、1983年に佐賀町エキジビット・スペースを開設しました。「美術館でも商業画廊でもない」もう一つの美術現場を提唱し、発表の場を求めるアーティストに寄り沿う姿勢を打ち出す実験的な展示空間として、佐賀町エキジビット・スペースは、美術、デザイン、ファッション、建築、写真といった従来のジャンルを超えた、日本初の「オルタナティブ・スペース」として海外からも注目される存在となりました。

佐賀町エキジビット・スペースで行われた展覧会は106回、関わった国内外のアーティストは杉本博司、森村泰昌、野又穫など400人以上にのぼり、2000年12月に幕を閉じるまで、多種多様な現在進行形の美術を発信し続けました。その一連の活動は「定点観測」という言葉に集約することができます。本展は、開設から17年にわたる佐賀町エキジビット・スペースの活動を通して、日本の現代美術の軌跡を辿るものです。



佐賀町エキジビット・スペース  
[撮影: 三好耕三]

